

スポーツ報道の国際比較

日本と英国のサッカープロリーグの新聞報道に着目して

スポーツマーケティングゼミナール 1314070 渡辺 祥太

1. 研究動機・研究目的

現代社会では真偽が不明なものも含めて世界中で多くのニュースが報道されている。特にスポーツに関してはTV、インターネット、新聞や雑誌など媒体を問わず毎日報道されている。現代社会において勝敗の確認をするのに翌日の朝刊を待つまでもない(松本, 2003)。現代のメディアには即効性という特徴があるが、新聞はインターネットやSNSといったメディアが持つ即効性という点では太刀打ちすることができない(松本, 2003)。

川戸(2007)によると、日本のスポーツ報道は試合結果に対しての具体的な考察よりも、好成績を収めた選手をヒーローやヒロインとして扱うことや選手の特集などに重きが置かれ、1つの事柄に対する過剰報道が目立つ傾向にあることが指摘されている。また池上(2006)や本多(2005)は、日本のスポーツ報道はテキストが主観的把握に基づいて構成されており読者の共感を求めるレトリックが好まれると報告している。日本のスポーツ番組は競技に関心を持つための動機づけ、物語や感動を提供する視点で成立していると報告している。また、多々良(2008)は日英の新聞におけるスポーツ報道を比較し、英語のヘッドラインの特徴は原因と結果の論理的関係を明記し、曖昧性を残さない因果志向的な特徴がある一方で、日本語のヘッドラインでは個人のプレーのみに焦点が当たることや、試合結果や因果関係を明記しないことがあるという、川戸(2008)と同様の日本のスポーツ報道の特徴を指摘している。

今後日本においては2019年から2021年にかけて国際スポーツイベントが開催され、日本から海外へ向けたスポーツ報道が数多く行われることは想像に難くない。つまり、日本の報道が情報ソースとして使用されることが増えると予測される。日本と海外の、特に近代スポーツ発祥の地である英国における新聞によるスポーツ報道を比較し、表現方法及び掲載記事の違いを明らかにすることは、より事実に近い報道が行われ事実に近い情報が国民のもとに届き、今後の日本スポーツの更なる発展や、スポーツ報道の一助となると考えられる。

2. 研究方法

本研究では国立国会図書館に所蔵されていたバックナンバーを用いた。研究対象はイングランドプレミアリーグ2015-2016シーズンであり、日本人が所属するレスターシティ、サウサンプトンの試合を研究対象とした。例外としてFIFAの国際Aマッチデーに行われているナショナルチームの親善試合などの各代表戦もそれぞれ対象とし、大見出し、中見出し、小見出し、写真や図表などの5種類に分類、日本紙と英国紙で比較調査を行った。今回はページの大見出しと採点欄での扱いに注目して研究を進めた。大見出しに着目したのは、読者の注目度が最も高く、新聞の顔であると表現されているからである(渡辺, 2010)。しかし、日本のリーグではないことに加えて2015-2016シーズンのイングランドプレミア

リーグには、レスターシティに岡崎慎司、サウサンプトンに吉田麻也という 2 選手しか所属していないため大きな記事になる可能性が高くないということもあり、採点欄にも注目した。また新聞には文字だけでなく写真も掲載されている。そのため大見出し同様に写真にも注目が集まる。今回の研究では大見出し、写真掲載について、シーズン開幕前、前半、中盤、後半の 5 つに分類し図表を用いて比較し研究を行った。

3. 主な結果と考察

英国も日本も目に見える結果を残せば記事になる。日英ともに国際 A マッチデーに行われる代表戦、「通算〇〇ゴール」などの記録には大きな注目が置かれていた。また、サッカーの競技の特性上 DF は記事になりにくい傾向にあるが、結果を残せばしっかりと特集として組まれる。しかし英国では結果はもちろんであるが内容も高いレベルを求められていることがわかった。また英国では該当選手の移籍金が記事に掲載されていることが多く、お金に見合った活躍が求められていると言える。日本人の特性、外部からの圧力などの影響が報道に与える影響については見られなかったが、日本では得点、内容に関係なく記事になる場合や、クラブや代表での試合出場の有無に関わらず記事になる選手もいるということがわかった。

これらのことから日本では人が記事になり、英国では事実がそのまま記事になると言えるだろう。海外でプレーしている選手については、生で見たりするなどの情報入手が困難であるため可能な限り多くの情報を提供する事が求められており、そしてそれが結果的に選手の将来を守ることにもつながるのではないかと考えた。結果を残すためには結果を残している国を参考にすることが有効であるといえるだろう。日本と英国どちらが結果を残しているかは明白である。英国の報道を参考にすることも有益であると考えられる。

4. 結論

今回の研究から、サッカーに関しては日本も結果を残している国の報道に習い、報道を通じて国全体でサッカーに対して良い雰囲気を作っていくことが必要なのではないかと考えた。海外で活躍している選手がいるのであれば、「貢献」などといった端的な言葉で表すのではなく、どのように貢献したのかを具体的かつ積極的に報道することや、試合中の重要事項を積極的に報道していくことで、より正確な情報が国民のもとに届くのではないだろうか。そのためには物語的な報道よりも第三者の立場に立った中立な報道が必要であるだろうという結論に至った。

5. 卒業論文の執筆を終えて

本論文執筆にあたり指導及び助言をしていただいた指導教員である工藤先生をはじめとする先生方及び院生の方々に深く感謝申し上げます。また同じ境遇で最後まで苦楽を共にした 12 人のゼミ員にも大変感謝しています。この場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございました。今後の日本のスポーツ界の更なる発展を願い謝辞に代えさせていただきます。